

教師の 腕前診断

今回のテーマ

「すんなり授業を開始する導入」

「姿勢を正してください。これから算数の勉強を始めます」日直の号令のもとに授業が始まります。場合によっては「静かにしてください」と日直の注意、さらに教師の説教が追い打ちをかけ、気まずい思いで授業に臨むこともあるでしょう。そんな思いをせず、すんなりと授業に臨める導入を紹介します。

1 国語の場合

Q1

すんなり国語の授業を始めるために、まず何をしますか？

- ① 学習問題の確認をする
- ② 読書
- ③ 漢字テスト



「②」の読書がお勧めです。

私のクラスは「7分間読書」で国語の授業が始まります。授業開始のチャイムが鳴ります。学習係がタイマーをセットして「今から7分間読書を始めます」と告げます。子どもたちの机の上にはふだんから読書用の本が置いてあります。それを広げて黙読を開始します。ほ

どなく教室はシーンとします。トイレなどで遅れて教室に戻ってくる子がいます。教室の静けさを察して申し訳なさそうに席に着き、読書を始めます。読書をしている子どもたちは集中しているため、遅れた子に目をやることはありません。

終わりを告げるタイマーが鳴ります。係の子どもが「7分間読書を止めてください」と言いながらタイマーをリセットし、所定の位置に戻します。読書を終えた子どもたちは読書カードを記入します。項目は日付、書名、著者、本の厚さとその累計です。読書カードというと、ふつうは冊数やページ数を書くと思いますが、これですと、活字の大きな絵本を選んで一冊、『ハリーポッター』のような厚い本や文庫でも一冊です。冊数では歯ごたえのある本を読んだ子どもの成果を正當に評価できません。そこで、横山駿也氏に教えていただいたように本の厚さで読書量を体感させています。

月末には累計分の厚さの本を重ねて、その高さを競います。ですが、読み終えた本はすでに手元にありません。そこで、教室にある本を使って累計の高さになるまで積み重ねます。「すごい、こんなに読んだんだ」塵も積もれば山となる、です。教室を見回すと本が山となっており積まれています。壮観な眺めです。自分だけではなく、クラスの読書量が一目瞭然となります。これを「積読(つんどく)」と呼んでいます。

Q2

さて、7分間読書は週に何回実施するといのでしょうか？

- ① 毎時間
- ② 週に一回

正解は「①」の毎時間です。

大方のクラスは読書の時間として一時間取っていると思います。図書室への往復は7分はかかるでしょう。図書室に入ってもすぐに本を選べない子がいます。本棚の前を行ったり来たり、手にとっては戻しを繰り返します。やっと本を選んで席につくと授業が終わります。目を転じると本棚の前で立ち話をしている子がいます。読書に関心がない、もしくは読書が嫌いなんでしょう。それに対して、本をすぐに選び、読了に挑戦する子もいます。こういう子は他の教科でもそうですが、課題に真摯に取り組み、教師の手を煩わせることがない子たちです。小学校の授業は、わからない、できない、やる気がない子をどうしたらその気にさせるのがポイントです。

そこで考えたのが「7分間読書」です。この実践には次の4つの効果があります。

① 読書の習慣がつく

国語の時間は毎日あります。その時間になると必ず7分間は読書をするようになります。読書が好きの子はそれ以外の時間にも本を読むでしょうが、嫌いな子でも一日のうち最低7分は読書をせざるを得ません。

② 事前に本を選ぶようになる

自宅から持ってきた本、図書室から借りた本など、読む本は事前に用意します。おかげで、本選びで際限なく時間を取ることがなくなります。用意しなかった場合は、7分間読書の時間に図書室から借りてきます。教室と図書室の往復と本を選ぶ時間を含めて7分間です。子どもたちはてきぱきと行動します。

③ お預け効果で読書の機会が増える

読書の時間は7分です。「もう少し読みたい」「せっかくなところだったのに」という場面で終了時間となることがあります。「続きを読みたい。切りがいいところまで読ませてよ」と後ろ髪を引かれる思いで本を閉じます。こういう時は読書の得手、不得手に関わらず、休み時間に続きをむさばるよう読みます。テレビドラマでちょうどいい場面で「つづく」となるようなものです。

④ ほどよく集中力が続く
静寂の中で読書が続きます。息を殺して読書します。誰ひとりとして無駄話をしません。終了のタイマーがなると、フーというため息が聞こえます。息を詰め、集中して読んでいたことがわかります。気持ちよい疲れを感じ、しっとりとした雰囲気になります。そんな中で授業を始めることができます。子どもの集中力は7分が限度かもしれません。

2 社会の場合

Q3 すんなり社会の授業を始めるために、まず何をしますか？

- ① いきなり資料を提示する
- ② 教科書の音読をさせる
- ③ 学習問題を板書する
- ④ 地図調べクイズをおこなう

子どもが乗ってくるのは「④」です。

地図帳を使ったクイズをします。例えば、県名当てクイズの場合は、次のようにおこないます。

1…4人1班を作り、机を合わせます。

2…1人がリーダーとなり、県名を言います。

3…他の子はその県を探し、「ハイ」と言って指差します。

4…早く見つけた子がリーダーとなり、問題(県名)を出します。

5…これを5分間繰り返します。

クイズが始まると教室は活気付きます。「えーと、えーと」「○○県、○○県」と声に出しながら探す子ども、息を殺して指を動かす子ども。県を指差すタイミングが同時だったのか、「ぼくの方が早かったよ」と喧嘩をしている子どももいます。こういう時は、リーダーが審判となります。騒然としているようにみえますが、子どもたちは真剣です。必死になつて県を探します。百人一首で上の句の一字を聞いただけで下の句を取るように、リーダーの初めの言葉に集中します。その時は静寂の瞬間です。集中と活気が交差した、知的好奇心あふれる時間です。

Q4 クイズのバージョンはどの周期で変更するといいいでしょうか？

- ① 毎日
- ② 一週間
- ③ 一ヶ月
- ④ 学期ごと

定着度、意欲継続度を考えると「③」の一ヶ月がいいでしょう。

私のクラスでは4月は県名、5月は県庁所在地、6月はアジア・アフリカの国旗、7月はヨーロッパ・アメリカの国旗とバージョンを

変えました。国旗を扱ったのはサッカーのワールドカップが開催されたからです。9月からは日本の河川編、山地・山脈編などに戻しました。

社会の時間はものを考えることが大切ですが、それは基本的な知識があつてのことです。県名と位置が一致しない子や、「瀬戸内海は波が立たずに風になる」とニュースで聞いても「あそこは瀬戸内式気候だから」と結びつかない子が増えてくる気がします。国語の基礎がひらがな・カタカナ・漢字なら、社会の基礎は県名・地名などです。クイズで扱っている県名・地名などは、授業としては一時間扱いで、その時間で覚えたこととして以後の授業を進めます。しかし、現実には厳しいものがあります。そこで、繰り返し扱うことで定着を図るのです。

3 授業の導入における共通ポイント

これらの実践に共通していることは、授業が始まったなら何をするかを子どもたちが事前にならわっていることです。さらに、それが子どもたちにとって楽しい取り組みであることです。それが5分から7分続きます。子どもたちは仮に授業に遅れても、すぐに加わることができます。また、遅れた罪悪感と、皆にそれを知られるという羞恥心から、真摯に反省し、以後遅れることはなくなります。何よりも教師が叱ることなく、子ども自身が反省します。

導入でその教科に関係する楽しい内容を取り入れると、子どもたちとよい関係を保ちながら、すんなり授業に入ることができます。